

<発達障害（知的障害）のある方の地域移行への取り組み>

あしたか太陽の丘 ○水野誠己 鈴木孝伸

要旨

演者は、障害者支援施設で障害福祉サービスにある就労移行支援を提供しながら、知的障害のある方々が就労しながら地域で生活できるようになるよう支援している。最近では、知的障害に発達障害も併せ持つ方が増えている。その方たちに適切な支援を提供するには自施設だけでは不十分なため専門機関の協力が必要と感じ、「発達障害者支援センターあいら」に協力を依頼し、専門機関の助言を受けながら支援を進めていることの報告をする。

1 目的

就労移行支援2年の利用期間を終えて自宅に戻り、自宅から他事業所に通所することを進路とした方が、自宅や事業所等の地域の中で落ち着いて生活できるための支援方法を見つける。

2 方法

これまで施設で行っていた支援方法が、「刺激の制限」であった。例えば、人へのこだわりから、特定の他利用者を見かけると大声をあげたり、破壊行為、大音量で音楽を聴く等の不適切行動を取っていた。これに対して特定の利用者と会わないように時間をずらしたり、場所を変更する等、見通しを立てたり、視界に入らないよう環境調整していた。一定の成果は得られていたが、これらの刺激の制限は施設内だからできることで、地域生活においては制限できない。また、不適切行動が地域生活に多大な支障をきたすと思われるが、効果的な支援方法が発案できず、専門機関である「発達障害者支援センターあいら」に相談を持ち掛けた。

「あいら」との支援会議の中で、次の指摘を受けた。本人がイライラしている時は過敏性が高くなっており、刺激を拾いやすい状況となっていること。その刺激への確認行動が固執やパターン化しやすいこと。不適切行動時は視野が狭く、現在の可視化では指示が通りにくいことであった。

地域生活への適応については、取り組みへの見通しを明確にし、周囲の刺激が気にならない環境をつくることの助言を受け、本人の行動をスケジュール化（視覚化）することや、提示場所の変更や環境を徐々に変更することで対応してみることにした。

「現在の視覚化、構造化の変更と本人の安定を図りながら、環境を徐々に変更していく」た

めに以下の対応をした。

- ① 不穏時に本人が拘る場所の視界内に取りべき行動（選択）を掲示した。
- ② 集中できる環境を整え直し、その中で徐々に周囲に人を増やしていった。

3 結果

生活の様子は、本人が集中している時は周囲に特定の利用者がいても気にならない場面があった。不穏状態になる時もあるが、以前と比べると興奮状態時の行動や時間に変化がみられた。

4 考察

見通しが立たない時に、周囲の状況に過敏になり、その刺激に晒され続けることで、自分を落ち着かせるために不適切行動となって表出していたと思われる。刺激を取り除く視点ではなく、刺激がある環境の中でも気にならずに生活できるための視点で構造化、見通しの可視化をしていくことが地域生活に移行する上で大切であると感じた。

5 まとめ

今回協力を得たことで、支援者の意識が「刺激の制限」から「見通しを持って行動することや物事に集中して取り組むこと」に変わった。見通しや集中を引き出すための構造化や視覚化をすることで、不安要因を減少させて落ち着いた生活ができるよう支援することは、地域でも可能と考える。この視点での支援方法を家族、他機関、地域にも理解を得て共有していく方法が、今後の課題と考える。
※「なお、抄録掲載については、本人、保護者の了解を得ている。